
白玉楼の家族模様 改訂版

L iger

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白玉楼の家族模様 改訂版

【Nコード】

N6843Y

【作者名】

L i g e r

【あらすじ】

冥界の姫、西行寺幽々子の気紛れで拾われた人間の子供がいた。その少女が成長しながら、妖怪と人間の寿命の差に煩悶するお話。……に、したい。

これは以前投稿した同タイトル作品の改訂版です。設定が変わっている部分があります。

ブログ（前書き）

改訂版を新しく投稿しました。以前のお気に入り登録をされている方はこっちに変えてくださると有り難いです。現在は非公開ですが、いずれフェードアウトする予定なので。

また、タグにもありますが週一更新の予定です。暫くは加筆修正をした以前のお話しかありませんが、ご了承下さい。

プロローグ

「あら？　これは……」

月が煌めくある夜。

一人の女性が何かを見つけ足を止める。

「捨てられたのかしら？　外界か里かは分からないけど……」

女性は毛布にくるまれたモノ——人間の赤子を見つめる。

そして少し考えた後、柔らかに微笑んでその赤子を抱きあげた。
その際に確認してみると、この赤子は女の子だった。

「まあ、妖夢も怒らないでしょう。非常事態だし……」

そう呟いて眠っている赤子の頭を撫でる。

赤子が起きる様子は一切ない。また、体温も低いことから長いこと放置されていたと分かる状態だった。

「さ、行きましようか。これから貴女の家にもなる場所へ」

これはある亡霊——西行寺幽々子の気紛れで捨てられた人間の子供の話である。

「ただいま。妖夢、ちょっと来てくれる？」

「幽々子様、お帰りなさいませ……って、それは何ですか!？」

妖夢は私に抱かれて眠っている赤子を見て奇声をあげた。予想通りね、もうちょっと予想外なりアクションを取れないものかしら。

「うるさいわ。この子が起きちゃうじゃない」

「も、申し訳ありません……。っそうじゃなくて! どうしたんですか、この子!」

まさか隠し子!? なんて言っている妖夢に溜め息がでてしまう。ああほら、ぐずつちゃったじゃない。

「……落ち着きなさい。この子は拾ったのよ、散歩の途中に」

「ひ、拾った? ……捨てられてたんですか?」

「そうね。そんなわけでこの子育てるから」

「ええ!? ど、どうしてですか! 里に預けた方が……」

「その里に捨てられた子だったらどうするのよ」

「う……。そ、それは……」

「外の世界で捨てられたのなら紫にも報告したほうがいいでしょうし、ここで育てる方が手間が省けるじゃない」

言葉に詰まったのを見て更にたたみかける。まだまだこう言った話術では弱いわねえ、妖夢は。

「し、しかし此処は冥界で、生者が住む場所では……」

「別にいいじゃない。此処の主は私よ? 決定権は私にあるわ」

閻魔にはとやかく言われそうだけど。まあ、それはその時考えればいいわ。

そんな事を考えながら妖夢を見る。すると私の決意を感じ取ったのか、深くため息をついて口を開いた。

「……分かりました。この子を育てましょう」

「あら、物分かりがいいじゃない」

「こうなると、幽々子様は折れないじゃないですか」

言いながら、妖夢は先刻の自分の大声でぐずりっぱなしの赤子をあやし始めた。なんだ、意外と気に入っているじゃない。

「良く分かってるわね。さて、それじゃあ名前でも決めましょうか」
「決めてなかったんですか？」

妖夢は私を何だと思っているのかしら。私だってついさっき見つけた子供に名前つけられる余裕なんてないわよ。

そんな関係のないことを頭から振り払い、名前を考える作業に戻る。難しいのよね、こういうのって。名は体を現すというし、変な名前にはできないもの。

「うーん……」

隣で妖夢も頭を捻っている。中々思い浮かばず、何か案はないかと周囲を見る。——あら、これは。

「？ 幽々子様？」

庭にある、たくさんの桜の木が目にとまった。昼に見るのとは違い、また美しい夜の桜。

それを眺めていると、ふと、頭にこんな名前が浮かんできた。

「――美桜^{みお}、なんてどうかしら」

「美桜……ですか。いいですね、それにしましょう」

同意を得、妖夢から赤子を受け取る。いつの間にか目を覚ましていたようで、私のことを見つめてくる小さな人間の子供。恐怖も憎悪も、そして幸福も知らない純粹な魂。その頭を一撫でし、こう告げた。

「貴女の名前は西行寺 美桜。これからよろしくね、私の娘」

一氣に妖々夢（前書き）

プロローグだけでは流石に寂しいので投稿。

一気に妖々夢

西行妖——それは咲かない桜の木。

その昔、ある歌人がその木の下で息を引き取った。しかしその後、その歌人を追う人が絶えなくなり、桜の木はその人々の精気を吸収した結果、妖になってしまったのだと言う。

そしてその木には『何者か』が眠っている、らしい。復活させるには西行妖を咲かせなければならず、そのためには『春』を集める必要がある。

故に私の母——西行寺 幽々子その人は、幻想郷中の春を集めている。

しかしそのために、顕世では五月になっても冬が明けないらしい。私からすれば、白玉楼は桜が咲いているため実感は全くない。

だが、当然被害のある顕世では大問題。遂に博霊の巫女が調査と解決に向けて動き出したらしい。……正直、四月くらいで動いても良かったのではと思ったりしている。

とにかく、今はその博霊の巫女とその仲間らしき人たちが此処に向かっているようだ。因みに私は、この所謂『異変』にはノータッチ。

ただ忙しそうに動いている母と、姉同然の半人半霊——魂魄妖夢を見ていることしかできない。

今もそうだ。西行妖を見ている母を、縁側から見つめている。

「どうしたの、美桜？」

「……何でもないよ。ただお母さんを見てただけ」

「あら、どうして？」

「ん……なんとなく、無理してそうだなあって」

「そんなことないわよ。それは妖夢」

「私からしたらどっちも、だよ」

確かに春度を表立って集めているのは妖夢お姉ちゃんだ。けど、お母さんもいろいろやっている。西行妖を咲かせて封印を解き、『何者か』を復活させるための準備とか。

「心配してくれてるの？」

「そりゃあね。大事な家族を傷つける可能性があるんだよ？ 気が気じゃないよ」

「ふふ、ありがとう。でも大丈夫よ」

お母さんはゆっくりと私に近づいて、隣に座ってきた。しかし視線は西行妖のまま。それに倣うように、私も咲かない桜の木に目を向ける。

「いざとなったら私の能力を使えばいいもの」

桜から視線を外し、今度は私に視線を向けてくる気配がする。しかし私は桜……正確に言うとその根本から視線を外さない。——否、外せない。

「たとえ何が復活しようとも美桜は絶対に傷つけさせないから、安心なさい」

「……そういうことじゃないんだけどなあ。それに——」

「？ なあに？」

「……何でもない。それより、博麗の巫女さんたちと妖夢お姉ちゃんが戦い始めたみたいだよ」

「そう。勝てるかしらね」

「無理だと思う。向こうは三人みたいだから、一人の相手をしてたら二人がこっちに来ちゃう。というか来てる」

「あらあら。美桜、あなたは下がっていなさいよ？ 怪我なんてしたら大変なもの」

「分かってる。お母さんと戦わない人とお話でもしながら待ってるよ」

苦笑しながら指示に従う。まったく、過保護だなあ。

——それにしても、やっと来てくれたんだ。博麗の巫女だけかと思っていたら三人も。これは嬉しい誤算だと思いながら、言い損なったことを心の中で反芻させる。

『それに——、お母さんが西行妖を咲かせられるとは限らないよ？』

お母さんが立ちあがり、私が少し離れた場所に座ったところで再度その人たち——博霊の巫女とメイドさんは来た。魔法使いさんは妖夢お姉ちゃんと戦っている。

「何か御用かしら。お二方」

「あんたがこの異変の首謀者でしょ？ 花見が出来なくて困っているのよ」

「だから、私たちが黒幕を懲らしめに来たってわけ」

「それは悪いわね。でも、もう少して西行妖が咲く。そうしたらき

ちゃんと返すわよ」

「西行妖い？ 何よそれ」

「うちの妖怪桜。何者かが封印されているみたいなの」

「封印されてるものを解くなんてしないほうがいいんじゃないかしら」

「……結界壊した人たちの言うことでもないと思うけどなあ」

今まで空気だった私が口を開いたことで場の視線が一気に集中する。

何か本当にごめんなさい。雰囲気を壊すつもりはなかったんです。

「……何、誰？」

「私の娘。可愛いでしょ。どこぞの巫女と違って暴力的に物事を解決しない自慢の子よ」

「人間？」

「ええ、そうよ」

冥界に人間がいるということが腑に落ちないのか、巫女さんは目を細めて私を見る。その視線に微笑みで返すと、訝しんだ視線を向けてくる。だがそれは一瞬で、気づくと再びお母さんに視線を戻していた。

「……まあいいわ。じゃあ二対二？」

「いいえ、あの子は戦わないわ」

「あつそ。じゃあ私が相手に——」

「そもそもね、戦いなんかに参加して怪我したらどうするの？ 軽い傷ならまだしも一生ものの傷跡が出来たりした日には、私は目につくものを全部壊しちゃうかもしれないわ。そして犯人は死んだほうがマシだと思えるくらいに精神的に追い詰めて、でも自我を失わせないようにして、永遠に私の手で苦しめる。『いつそ殺してくれ』」

って懇願せざるを得ないくらいにキツイのをね。というかね、新しく出来た弾幕ごつこと言えど、可能性は低いけど死ぬかもしれないのよ？ そんな危険なものにどうして大事な娘を――」

「お母さあん！ もうやめて!？」

巫女さんとメイドさんの目が可哀そうなものを見るソレになるから！

「……………もう分かったわよ。私がやるから咲夜、あんたは見学しなさい」

「……………ええ。春が戻るなら私が出張る必要もないし」

そう言つてメイドさんは私の近くに腰を下ろした。

……あの、この微妙な距離は初対面故のものですよね？ 決してお母さんの言葉に引いたとかそんなのではないんですよね？

若干私たち親子の評価が気になるが、それよりも今は巫女とお母さんの戦いが優先だ。評価は後で掘り葉掘り訊こう。

少ししか見ていないが、あの巫女さんは強いと分かる。ああ、良かった。これで――

「――西行妖を咲かせずに済む」

「……………え？」

「いえ、何でもありません。こちらの話です」

訝しげな視線を向けてくるメイドさんをスルーしつつ、戦いを見る。守る。

純粹な殺し合いならとにかく、これは弾幕と呼ばれる決闘法。あのお母さんを倒せる可能性があるのはこれだけだろう。

——実を言えば、博麗の巫女がお母さんを倒せず春を奪われたら、私が西行妖を咲かせるのを阻止しようとしていた。お母さんの言う、『何者か』を復活させなくなかったから。あくまで推測でしかないが、その何者かの見当が私にはついていない。

お母さんが読んだ古い書物などを私も読み、自分なりに考察した結果だ。幼少期からの紫様たちの英才教育のおかげで、それなりに知識はある。

私の推測が正しいとすると、あの桜の下に眠るは母の亡き骸。亡霊の唯一と言っているいい弱点。則ちそれは、最終的に母の消滅を意味している。

それが分かっているにも実行しなかったのは恐かったから。自分を庇護し、育ててくれた大恩ある人に歯向かいなくなかったから。

……でも結局、これらは私の勝手な理由。私情を挟んで、一番最悪な状況を招きそうになってしまった。巫女さんのおかげでそれは回避できそうだけど、そんなのは結果論でしかない。本来なら、娘たる私が、事実を知った私が行うべきことだった。

「……弱いなあ、私は」

この呟きは、メイドさんにも聞こえずに霧散していった。

一気に妖々夢へ決着

だんだんと激しくなっていく戦闘。それに伴って美しい弾幕が空を覆う。

今は巫女さんがやや優勢といったところだろうか。それでいい、封印を解くなんてことはしたくない。お母さんも興味本位でやっていることだから、負ければ素直に春を集めるのをやめてくれるだろう。

「冷静ね」

「え？」

「母親なんですよ？ 心配しないの？」

「弾幕“ごっこ”ですから。遊びでそこまで心配はしませんよ」

「そう」

「それより、貴女方のお仲間である魔法使いと戦っている妖夢お姉ちゃんのほうが心配です。確か……そうだ、魔理沙さん。そんなお名前でしたよね、咲夜さん？」

刹那、隣にいたはずのメイドさんが私の背後にいた。その手にはナイフが握られ、ついでに言うそれは私の首元にある。

「……初対面である私たちの名前を知っているのは何故かしら？」

「やめておいたほうがいいですって。今は平気ですけど、お母さんがこれに気付いたら殺されちゃいますよ？」

あの人は私のことになると思保護だからね。未だに一人で遠出させてくれないし。もうここまで来ると、当事者なのに笑うしかないよ。

「質問に答えなさい」

「怖いなあ。少し落ち着いてください」

強く宛てがわれるナイフに気付き、その手を掴む。そして半ば強引にその腕を遠ざけた。

「っ……何を、したのかしら？」

「何って、ただ引つ張っただけですよ。あ、も、もしかして痛かったですか？ すみません、力加減がよく分からなくて……」

「別に痛くはないわ。そういう事じゃなくて、どうして私の動きをそう簡単に止めることが出来るのかってこと」

「？」

「だから、男性だったらまだ分かるのよ。悔しいけど女性との筋力差があるもの。でも、私と貴方は同性で年も近い。なのになぜ、私は貴女の拘束から抜け出せないのかしら？」

あ、そういう事。

「……もしかして、あなた男なの？」

「生まれて始めてそう言われました。私は女ですし、歳だってまだ十代ですよ」

そこまで中性的な顔だったっけ、私。

「まあ、まず名前のことですが、私が飛ばした式神を通じて知ったんです。戦闘などもそれを通じて」

「……式神？」

「はい。鳥型でその視点を私が見ることも、音を聞くこともできます。失礼ながらそれを使って皆さんの様子を」

紫様に教わった術の一つだ。無論、妖力ではなく靈力を使う仕様だし、藍様や橙に憑いているものと違い、呪符まじないふから召喚するタイプのもの。

「へえ。……で、この腕のことは？」

「単なる筋力差では？」

「どれだけ鍛えたらそんなのになるのよ。私だって一般人より強いと自負しているもの……もしかして能力？」

「いえ、別に私そんなの持ってませんよ。強いて挙げるなら、少し陰陽道を使えるくらいですか」

私はどこにでもいる一般人より靈力が高いくらいで、あとは何も取り柄はない。魔力なんて扱えないし、精々空を飛ぶのが関の山だ。

「あとはまあ、日々大妖怪と呼ばれる方々と訓練してますからね。どこを押さえれば力が入りにくいかとか、そういう武芸的な技術も大きいんじゃないでしょうか」

組手の相手は主に藍様で、妖夢お姉ちゃんとは剣道みたいなことをしている。二人にはかなり手加減をもらっているが、それでも妖怪に勝てるわけもない。

自分以外の人間と触れ合うこと無く今日まで来たから分からなかったが、成る程私の力は人間の一般女性よりかは強いらしい。今後人と接することがあったら気をつけようっと。

掴んでいた手を放し、お母さんたちの方向をもう一度見る。するとそこには、膝をついているお母さんの姿があった。

……しまった、戦闘見逃してた。お母さんの弾幕、綺麗だから見たかったのに。

「さあ、春を返してもらおうよ」
「……仕方ないわね」

その言葉とともに飛び散っていく春。これで幻想郷も元通りになるだろう。そう思うと、知らず知らずのうちに安堵のため息が漏れていた。

「なんだ、もう終わったのか」

「くつ、敵に情けをかけられるとは……」

「あ、妖夢お姉ちゃん！……大丈夫？」

「ん？ お前誰だ？」

「初めまして。この異変の首謀者の娘です」

「美桜！ 大丈夫だった？ 怪我してない！？」

……妖夢お姉ちゃんも過保護だよね。それとも私が頼りないのかなあ。

「私は平気だよ。それよりお姉ちゃんのほうが……」

「私に負けてボロボロだぜ」

「しかも肩まで借りてここに来てるわね」

「くつ……」

魔理沙さんと咲夜さんの言葉に苦々しげな顔になるお姉ちゃん。凶星つかれて情けない、っていう感じの表情をしている。

怪我はそんなに酷くはなさそうで、休めばすぐに回復する程度だ。ぱつと見、お母さんのほうもそんな感じ。やっぱり弾幕ごっこって、こういう血を流しすぎないところがいいよね。

「ふうん、亡霊の娘が人間か。さすが冥界、ここも常識に囚われて

ないぜ」

「そうかもしれないね。でも種族が違えど、私はお母さんが好きです。もちろん妖夢お姉ちゃんも。常識がどうか、そんなのはどうでもいいじゃないですか」

「み、美桜……！」

「うわっ、抱きつかないで妖夢お姉ちゃん！ 危ないよ！」

そう言いつつも、妖夢お姉ちゃんを抱きしめ返す。やっぱり安心するなあ……。

こうして最後はほのぼのとした空気になりながら、異変は終わりを告げたのだった。

一気に妖々夢く解決

「ごめんなさい美桜、妖夢。負けちゃったわ」

「いえ、私も負けてしまいましたし……」

「私は別に……」

「そうね、美桜はむしろ安心してゐるわよね。西行妖の封印を解くのを反対してたもの」

「……………」

「責めてるわけじゃないのよ。きちんと考えた上でのことでしょう？」

「……うん」

「だったらいいのよ」

優しく微笑んで私の頭を撫でてくれるお母さん。小さいころから変わらない手つきに安心する。

……けれど、今は罪悪感みたいなものもある。やはり、今度紫様に事実を聞いてみよう。今度こういうことが起きたら、私がお母さんを説得できるように。

「……いつまでやってんのよ、あんたら。私はここにこんな茶番劇見に来たわけじゃないのよ」

「あら、貴女たちの目的である春はもう返したじゃない。親子の間を邪魔するなら帰ったらどう？」

「幽々子の言う通りだ。咲夜はもう帰ったし、私たちも帰ろうぜ、霊夢」

「そういう訳にもいかないでしょ。一応この結界直しとかなないとまずいじゃない」

「ああ……それなら二、三日後にもう一度いらっしゃい。結界を張った本人も出てきてるでしょうから」

「またここに来て？ あんたらが頼んどきなさいよ」
「壊した本人が頼むのが筋つてものでしょう？」

ニツコリと笑って言うお母さん。それを見て霊夢さんは深々と溜め息をついた。そんな面倒くさいのだろうか。

「……分かったわよ。来ればいいんでしょ、来れば。魔理沙、あんたも共犯なんだから来なさいよ」

「うへえ……こうなったら咲夜も道連れだ」

心底面倒くさそうに呟いて二人は帰って行った。まあでも、冥界に進んで来ようとする人なんて普通はいないし、更には紫様のことだから一筋縄ではいかないだろう。そこには同情する。

余談だが、あの上はお母さんが一日中私にべったりだった。曰く、『あの戦いで美桜分がなくなった』らしい。嬉しいんだけど、この年になって風呂に一緒に入るのは、ねえ……？

「——あの桜に埋まっている『何者』か。それはお母さん……西行寺幽々子の亡骸。そうですね、紫様」

「……問いかけじゃなくて確認じゃない、その言い方」

「そうすれば、辻褄が合うんです。お母さん——亡霊の弱点である亡骸が見当たらないことも、生前の記憶がないことも」

言いきると、諦めたかのように溜め息をつく紫様。

——今この場所には、私と紫様しかない。

時刻はあの異変解決から三日が経った夜中。藍様は約束通りやって来たあの三人の相手をしている。おそらく橙もだろう。お母さんとお姉ちゃんはそれと桜を観て楽しんでる。

だから、この話をするのにはちょうどいい環境となったわけだ。

離れているはずの藍様たちの弾幕の音も聞こえるくらいの静寂が続く。勿体つけているのか、はたまた言い出しにくいのか。……それとも訊いてはならないこと、だったのだろうか。

様々な思いで心配になってきたころ、ゆっくりと語るように紫様が口を開いた。

「幽々子はある高名な歌人の娘だった。その歌人はあの桜の下で生涯を閉じ、その彼を慕う多くの人がその後を追った。あの桜の木は、その人々の精気を吸って妖怪となってしまった」

一言も漏らさないように耳を傾ける。

……ここまでの話は私も知っている。ここからの話は私、そしてお母さんも知らない……というよりは忘れてしまった真実。今更ながらに、聴いてしまってもいいのだろうかと不安になってくる。

「妖怪となった桜は咲く度に人を死へ誘うようになり、その影響で幽々子の能力にも変化が生じた。『死を操る程度の能力』を持つようになった彼女は、自身と父の愛した桜が人を殺すだけの存在になったことを嘆き疎んじ、その桜が満開になった時に自害した……」

どこか遠い目をしながら、最後は呟くように言った紫様。やはり私は、要らぬことを掘り返してしまったのだろうか……。

「でも私はその力がある限り幽々子が転生しても同じ苦しみを味わうと考え、彼女の体を鍵として桜の木に封印を施した。それによって西行妖が咲いて人を殺すことはなくなり、幽々子も転生することがなくなった。亡霊となった彼女は生前の記憶をなくしてしまっていたけれど、それはむしろ好都合だったわ。今はもう悩まずに此処で暮らせているもの」

これでお終い、と言うように私に顔を向けてくる。時間に直せば数分しか経っていないはずなのに、私の額には脂汗が浮かんでいる。想像以上の話にただ呆然とすることしかできず、俯いて口を開いては閉じる動作を無意味に繰り返す。

……やっぱり、私なんか踏み込んだじゃない領域だったんじゃないだろうか。

「そんなことないわ」

「え？」

「貴女はここまで推測しておきながら、幽々子を止められなかったことを悔やんでいるのでしょうか？ でもそんなの気にしなくていいわ。いくらその人の為とはいえ、大好きな家族に刃を向けるなんてことは中々できないもの」

「けど……！」

知りながらにして止めなかったのはやはり問題だ。私の私情のせいで、あと一歩でお母さんは消えてしまう所だったのだから。

「それがわかればいいのよ。今回の良い経験」

「け、経験……？」

「そう、経験。悩み、惑い、考え、それでも解決できなくて苦しんだ。これらを忘れずに次に生かしなさい。最初から何でも出来る者などいないのだから」

……そう、か。確かにずっと悩んでいても仕方がない。それよりも、この次にこんなことが起きたら真っ先にお母さんを救えるように努力しよう。今度こそは、誰よりも早く解決できるように。

そう胸に誓っていると、紫様が微笑みながらこちらを見ていた。その笑顔はどこかお母さんに似ていて、とても私を安心させるものだった。

「……紫様？」

「いえね、今の貴女と私の話を聞く前の貴女が、まるで別人なものだから」

「……そうですか？」

「ええ。その変化が人間の美しさと儚さ。妖怪はそんな急に変わらないもの」

そう言うと、突然スキマを開いてそこに座り込んだ。

何事かと思い耳を澄ますと、さっきまで聞こえていた音が聞こえない。弾幕の音が止んだということは、藍様との戦いが終わったということ。つまり、次は紫様の番だ。

「その成長は永い時を生きる私たちにとって新鮮なもの。幽々子は貴女が来てから以前よりも楽しそうになったわ。ぜひとも、その姿を見せ続けてあげてね。……もちろん私にも」

言い終わるや否や、既にそこに紫様の姿はなかった。しかし、その言葉は私の心に深く刻まれた。

「見せ続ける、か……」

永き時を生きる妖怪と、短き時を生きる人間。このまま成長すれば、お母さんよりもお姉ちゃんよりも早く私は逝く。

……お母さんは、そんな私をどう思っているのだろう。

私はこの先訪れるであろうそれに、どう立ち向かっていけばいいのだろう。

浮かんでくる出口の見えない考えを振り払い、お母さんたちのもとへ歩いて行った。

萃夢想〜強奪の片棒

博霊の巫女やお母さんからの依頼で重いこ……軽やかに腰をあげたかに見えた紫様だったが、なぜか幽明結界を張り直さなかった。

おかげというかなんと言つかで、幻想郷と冥界の行き来が簡単にはなったけど、そうなると幽霊がたくさん幻想郷に流れてしまうんだけど……いいのかな。

まあ、紫様には紫様の考えがあるだろうし、被害と言えば花見に来る人たちが増えたくらいだから放っておいてもいい……はず。

また白玉楼では、あの異変後に行き来が簡単になったのと、今回の異変のお詫びと言う良く分からない名目で宴会が開かれた。名目はどうでもいいからとにかく飲ませろ！　みたいな人たちだったから別にそれは構わなかったんだけど……。

しかし最近、その宴会の頻度が半端ない。場所はここから博霊神社に移っているが、三日に一度は開かれている。私は人が多い所が苦手なので滅多に行かないし、行くにしてもお母さんに半ば無理矢理連れて行かれる感じだが。

その宴会で知り合った人たち——紅魔館の人やアリスさん、霊夢さんや魔理沙さんも少しおかしいと思っっているようだけど、実質的な被害があるわけでもないのだから放っているようだ。

でも、宴会が近づくにつれて強くなっていく妖気は気になる。お母さんはその正体が分かっているみたいだ。その上で、特に何をする気もないみたいだから害はないんだろうけど……。

「気になるなあ……」

「何がかしら？」

「……紫様、いきなり現れないでください。驚くじゃないですか」

何もない空間からいきなり現れた紫様に声をかける。全く、いつから見てたんだろう。

「とてもそうは見えないけど。それより、何が気になるの？」

「今の宴会騒動です。頻繁にやりすぎじゃないですか？」

「ああ、それね。私としてはむしろ貴女が参加してないことに驚いているわ。あの娘の能力でも本質は変えられないのね」

「……どういふことですか？ 紫様には犯人の目星が？」

「ええ。私の古い友人よ。あ、そうだ」

いいこと考えた、と無邪気な子供のように弾んだ声で言う。こういう時は大抵、周囲にとっては良い事ではない。

「今からその娘をおびき出すためにいろいろしようと思っているんだけど、貴女も来る？」

「いろいろって何ですか。恐いので遠慮しておきます」

「まあまあそう言わず。それでは出発」

「ちょ、紫様あ！」

スキマに落とされるの恐いんですよ！？ 本当にやめて下さい！

というか、それよりも勝手にいなくなったらお母さんが怖いんだよね……。

……ああもうどうでもいいや。紫様と一緒にこの異変？ を解決してやる！！（↑やけくそ）

「そうそう、その意気よ」

「そういえば、紫様って宴会に招待されてませんよね？」
「そんな些細なことはどうでもいいのよ」
「（一番重要なことじゃないの？）」

そんなこんなで犯罪の片棒を担がされることが決定した。

「まずはここかしらね」
「此処は……？」

紅い部屋に落とされた。近くにはベッドがあり、そこには幼い容姿をした見覚えのある妖怪——って、最初で此処！？ 徐々に難易度を上げましょうよ紫様！

「初めまして、通りすがりの吸血鬼さん。ちょっとお時間頂ける？」
「通りすがってはないですね？」
「誰よ？ って美桜もいるじゃない。何か用なの？ もう寝たいんだけど」

「ほら貴女、良いお酒を持っているでしょ？ 寄越しなさい」

流石紫様だ。吸血鬼——レミリア・スカーレットさんから何の対価も払わず酒を奪う気だ。………なんで酒？

「いきなり何？ ぶっ飛ばしてもいいの？」
「いや……あの、紫様？」
「それを頂きに来たのよ。美桜と一緒に」
「紫様あ！？」

なんで私にも罪を着せるんですか！ 巻き込むのはやめて下さい！

「……ふざけた奴ね。どうやって来たのかは後で美桜に聞くとして、とりあえずは追い返してやるわ」

「ふふ。おねむの頭で勝てるほど、私は弱くないわよ？」

同時に空に浮かび上がり、激しい弾幕が展開される。美しくもあるが、今は鑑賞している余裕などない。そんなのしてたら普通に死ぬる。

なんで私こんな目に遭ってるんだろう。紫様、これはあれですか？ 流れ弾を避けるみたいな修行ですか？

……帰りたい、助けてお母さん！

同時刻・白玉楼

「……ハッ！ 美桜が私のことを呼んでいる……？ 美桜ー！」

「ゆ、幽々子様？ 血相を変えてどうかしましたか？」

「美桜が私を呼んでいるのよ！」

「は、はぁ……？」

「さあ、もう陽も昇るしさつさと寄越しなさい」

「……仕様がな。ブランデーくらいくれてやるからさつさと帰ってくれ」

「あら優しい。美桜、次行くわよ」

「……美桜、後で覚えておきなさい」
「なんで私!？」

現実逃避をしていたらいつの間にか戦闘が終わっていた。紫様の勝利で。やっぱり強いなあ……。

留まる理由も無いので、すぐにスキマを開かれる。移動する直前、レミリアさんに恨みの籠った眼で睨まれたのはおかしいと思うんだ。私も被害者のはずですよ。

「次はここら辺」

「アバウトですね……ん？ あの人……」

「その通りすがりの魔法使いさん。怪我をしなくなったらそのお酒を寄越しなさい」

紫様、それはただの恐喝だと思うのです。どうしてそんなに好戦的なんですか……。

「心配しなくていいわ、美桜。きちんと予告状も持ってきてるから」
「意味ない! それと一緒に来たら意味ないですよ紫様!」

「……何？ 漫才なら今夜の宴会でやりなさいよ。ああ、そっちの貴女はお呼ばれされてなかったわね」

「今夜は行くわ。だから貴女のワインを奪いに来たの」

「……言ってる意味がわからないんだけど。まあ、こういう時の為に弾幕ごっこがあるのよね」

……結局、またこうなるんだよね。二人の戦いから逃げ惑うしかないんだよね。

それにしても、どうして紫様はみんなの酒を奪っているんだろう？

「ワインも手に入れました」

「美桜、こいつは何？ 今日来るんなら別に持っていてもいいけど……」

「本人の言によれば行くそうなので平気です。……多分」

「最後のは……」

「さあ美桜、次に行くわよ」

「ごめんなさい、アリスさん。私もよく分からないんです」

スキマが閉じる前の呆れた顔が印象的だった。

「……どうしてさつき済ませなかったんですか？」

「その通りすがりの半幽霊さん、お時間いいかしら？」

さつき私を連れだしたときに一緒にやればよかったのに。これじゃ二度手間だ。でも、紫様ってこういうことを楽しんでる節があるからなあ……。

「あれ、紫様？ いつもながら突然ですね」

「ご挨拶ね、幽々子にチクるわよ？ 美桜をいじめてたとか」
「絶対にやめて下さい！」

お姉ちゃんがそんな事するはずないって分かっているとと思うから、お母さんに言った所でどうってこともない気がする。

「って、美桜。紫様と一緒にだったのね」

「あ、うん。そうだよ。もしかして何かあった？」

「……幽々子様がさつきからずっとあなたのこと探してるの。それはもう鬼気迫る勢いで」

「……really？」

「うん。『一人で勝手に出歩いているならお仕置き、もしも誰かに連れまわされているならその人には地獄を……』って、言いながら」

視線をそつと紫様に向けると、尋常じゃないくらい冷や汗をかいていた。心なしに顔色も悪いようだ。

ここに長く留まれば留まるほど見つかる可能性が高くなるので、早く目的を完遂させなければ。

「妖夢お姉ちゃん、今日のお酒を私に預からせてくれない？」

「え？ どうして？」

「それが紫様の目的みたいだから」

理由はよく分からないけど。

「うん……まあいつか。きちんと持ってきてよ？」

「もちろん」

「じゃあ、はいこれ」

「ありがとう。紫様、早く次に行きましょう。見つかったやいます」

紫様には何か目的があるようなので見つかるわけにも行かないだろう。それに乗りかかった船だ、ここまできたら最後まで付き合いたい。

「そ、そそそうね。つ、次に行きましょう!」

「……………」

それにしても、あの紫様がこんなに怯えるなんて。お母さんって怒ったらどうなるんだろう……。

「……………じゃあ、またあとでね、妖夢お姉ちゃん」

「……………ええ。幽々子様には黙っておくから」

絶対にお母さんを怒らせないようにしようと決意しながら、若干体まで震えている紫様の後についていった。

萃夢想〜主人公と接触

「み、美桜……あなたなら幽々子に口添えしてくれるわよね？ 無理矢理じゃないって言ってくれるわよね!？」

「お、落ち着いてください紫様。ほ、ほら、目的の魔理沙さんがこち来てますよ」

『幽々子を怒らせたなら……も、もうあの惨劇は』とぶつぶつ言っている紫様を宥めつつ、今回の目的の人に近づく。今度ばかりは紫様に任せるのは無理そうだなあ。

「……お？ なんだ、美桜じゃねえか。隣に居るのはいつぞやの妖怪か」

「こんにちは。実は少しお話があるんです」

「話？ なんだ？」

「魔理沙さんの持っているお酒、いただけませんか？」

「はあ？ 嫌に決まってるだろ。これは今日の宴会用だ」

まあ、普通にこうなるよね。仕方ない、ここは――

「――無理矢理気絶させて奪うしか道がないか」

「いや弾幕ごっこの流れだよな!？」

「いえほら、今の紫様だと流れ弾も避けられそうにないもので」

もう顔色が真っ青を通り越して白くなっている気がする。どれだけ怖がっているんですか。

「なんだ？ どうしたんだ、こいつは？」

「……今日もいい天気ですねー」

「話をそらすな。何があつたんだよ？」

「正確に言えば“これから起きる”ですね」

お酒を集めて回るならお母さんに会うことは必至。私に出来るのはその時の被害を最小限にするように働きかけることだけだ。

「訳が分からんが、酒は渡さないぜ？ 欲しかったら実力で奪ってみせろ」

「もちろん……と言いたいのですが、今日はそこまで時間もないので等価交換と参りましょう」

「交換？ 何とだ？」

「コレです」

「なっ！？ そ、それは！」

取り出したのはキノコ。それも、そこらに生えているものとは違う、秀逸な一品。

この胞子が飛び交っている魔法の森で珍しいものに分類されるので、魔理沙さんなら喉から手が出るほどに欲しい素材だろう。

因みに、私が持っているのは今ここで運よく見つけた。さすが紫様、スキマを開く場所が神懸かっている。……まあ、要は偶然だ。

「どうですか？」

「ぐっ……ここで酒を渡したら今日持つていくものがなくなるが、そのキノコはおいしいぜ……！」

「そんなに心配しなくても、少しお借りするだけです。きちんと今日の宴会に持つていきますから、魔理沙さんに損はありません」

あつたとしても、それは紫様の責任だ。ああなる前にきちんと用途を教えて欲しかった。

「……話がうますぎる気がするが、のったぜ。ほれ、交換だ」

「ありがとうございます。あ、それと今日の宴会に紫様ともう一人増えても平気ですか？」

「もう一人？ 紫だけじゃないのか？」

「私もよく分かりませんが、紫様の御友人だそうです」

「ふーん。ま、いいぜ。霊夢には言つといてやるから」

快諾してくれた魔理沙さんにお礼を言い、紫様へと振り返る。そろそろいつもの調子に戻ってくれてるといいんだけど……。

「……大丈夫。あの時みたいに本気で能力を使われたり、藍を盾にされたり、踏みつけられたりなんてしないわよ、ね……？」

……………。

「『ありがとうございます、楽しみにしている』と仰られています」

「いや嘘つけ！ 明らかに物騒な事呟いてるじゃねえか！」

最後なんて疑問形ですもんね。

「まあ、酒席に血が流れるなんていつものことでしょう？」

「いや、そうでもないんだが」

「細かいことは気にしないで行きましょう。ほら、紫様。次に行きますよ」

「お前って結構鬼畜なんだな……」

何を言います。慣れです、慣れ。

「ふふっ……美桜、どれだけ長く生きても抗えない運命というものがあるのね」

「紫様、そろそろ戻ってきてください」

「……あんたら、一体何しに来たのよ」

未だに虚空を見つめている紫様に声をかける。ほら、霊夢さんも呆れてますよ。

「……そうね。取り敢えず、今はこっちが優先だわ。だから霊夢、酒を超越しなさい」

「飛躍しすぎ。何の話よ」

「だからお酒。神前にあるうが関係ないわ。超越しなさい」

「はあ？ 今晚用なんだから駄目に決まってるでしょ」

「良いから超越しなさい！ 私は早く幽々子の所に行かないといけないのよ！」

「なんでキレルのよ！ 私の方が怒鳴りたいわ！」

しつかりきちんと怒鳴ってますよ霊夢さん。

紫様は紫様で、神前に祭つてあるお酒に躊躇なく手を伸ばせるくらいに錯乱しているようだ。……いや、これは素だろうか。

「いいかしら霊夢。私はね、苦しめるのは好きだけど苦しめられるのは嫌いな」

「いきなり何？」

「屈服させるのは得意だけど弄られるのは苦手なの。言ってる意味がわかるでしょう？」

「いや全然わからないんだけど」

「幽々子を怒らせたら私は終わりってことよ！ 頼むから酒を渡して！」

「結局どういうことよ。だから駄目って——」

「……そんなに欲しいならスキマを使えばいいじゃないですか」

空気が凍った。

「そうよね。なんで気付かなかったのかしら、私」

「だいぶ混乱していましたから……」

「あーもう！ 本当に何しに來たのよあんたら。もうみんな集まってくるんだから、今更酒持ってたってしょうがないってのに」

「靈夢は知らなくていいことよ。さて、次は鬼門……いえ地獄の門ね」

遂にお母さんか……。怒ってる、よね。黙って出てきちゃったんだし……。

「さつきから何を言ってるの？」

「靈夢、美桜。私が死んだら骨は幻想郷中に撒いて頂戴」

「量が足りない。じゃなくてあんた、まさか幽々子を怒らせたの？」

「しかも美桜絡みで、ね……」

「ご愁傷様。あの親馬鹿怒らせたら面倒よ。宴会でも子供自慢が鬱陶しいし」

「ごめんなさい……」

お母さん、他人に迷惑かけるのは駄目だよ。しかも自慢とかやめ

て、切実に。恥ずかしいから。

「さて、そろそろ腹を括りましょうか。美桜、行くわよ」

「括るのはあんただけでしょうが。せいぜい酷い目に遭ってきなさい」

「だ、大丈夫です紫様。私が話をしますから」

「本当良い子に育ったわね……。いつその事、私の子にならない？」

紫様がそういった瞬間、ゾクリと全身が栗立った。そんな馬鹿な、いつの間にここへ……！

「面白い冗談ねえ。でも、そういうことは時と場所を選んで言ったほうがいいわよ？」

場に響くは底冷えするような声。向けられているのは紫様なのに、周りの人にも恐怖を与えている。

そんな声に対し、紫様は首をゆっくりと、冷や汗をたっぷりかきながら振り返る。

「ゆ、幽々子……？　け、気配がなかったけど、いつの間にここに……？」

「たった今。それより紫、何も言わなくても分かるわよね？　だって私たち友人だもの」

そこには、いつになく絶対零度の目を向けているお母さんが立っていた。その雰囲気はいつものおっとりとしたものとは到底似つかない殺気で満ちている。

——さあ、最終決戦（紫様の助命嘆願）の始まりだ。

萃夢想く母との談判

ゆつくりと、一步一步を確かめるようにお母さんが近づいてくる。不味い、これはすごく怒っている。

しかもその怒りは少なからず私にも向いている。勝手に出ていったのか、紫様に連れまわされていたのかをまだ判断しかねているらしい。

「お、お母さん。どうしたの？ そんなに怖い顔して」

「美桜、正直に答えなさい。紫に連れていかれたの？ それとも自分から？」

これはこの先の全てに関わってくる重要な質問。ここで選択ミスをするれば即バッドエンドだ。

……紫様を助ける気だったけど、まさかお母さんがここまで怒っているとは思わなかった。正直紫様を売って助かりたいが、それをするとな紫様から不評を買ってしまう。そしてまた私にちよっかいを出す。そしてお母さんがまた怒る。だから私は紫様を売（ry
無限ループって怖いよね。

「紫様がきつかけただけどその後は私も乗り気になった、よ？」

「そう。紫が悪いのね」

……………あ、あれ？ 何かを間違えた？

「い、いや、一概にそうとも言いきれないんじゃないかな」

「どうして？ 全ての事象には原因があり結果があるの。今回の場合は紫が原因でしょう？ 結果や過程をどうこうするより、原因を叩いた方が楽じゃない」

なんということでしょう。交渉開始一分と経たずに、早くも紫様の処置が決定されそうです。

くつ、流石に一筋縄ではいかないか。正論なんだか違うんだかよく分からない理論を言わせて周りを煙に巻かせたら天下一だからね、お母さんは。

……あ、勿論褒め言葉だよ？

「ゆ、幽々子。お願い、話を聞「あなたには発言権を与えてないわ」……」

弁明しようと口を開かれた紫様に、私に向けていた眼とはまったく違う視線を投げかける。更には発言まで却下するあたり、途轍もなく大きな怒りが見える。

「お、お母さん。話くらい聞いてあげようよ……」

「閻魔は相手の話を聞かないで判決を下すのよ？」

「それは生前の所業が全部分かつてるからだよ」

「あの鏡って嫌よね。閻魔って全員あれ持ってるのかしら」

「たぶんそうなんじゃない？ ……じゃなくて、話を聞いてあげてつてば。お願い、お母さん」

必死に頼み込むと、渋々ながらも紫様に発言権を与えた。紫様、御自分で無罪を勝ち取るチャンスです。頑張ってください！

そんな私の視線に応えるように頷き、紫様は口を開く。

「——鬼が悪いわ」

「美桜、どうして止めるの？ 大丈夫よ、友人同士の無邪気な触れ合いじゃない」

「どう見てもその手は何かを握りつぶす動きだよ!？」

今なら頭蓋骨を割れるかしら、と恐ろしいことを言うお母さんを必死で止める。もはや邪氣しか感じられない。

どうして余計に怒らせるような事を言うんだと、恨みを込めて紫様のほうを見る。……あれ？ 誰か増えてない？

「あ、ゆ、紫！ なんてことするのさ！ せつかく紫の最期を見れると思つたのに！」

「幽々子、こいつ。こいつが全ての元凶よ」

「ああ！？ 私を売るなあ!!」

「黙りなさい！ 実際あなたのせいじゃない！」

そのまま口喧嘩を始める紫様と見知らぬ少女。

……え、誰？ あの立派な角が生えているのは誰……って、角？
まさかあの少女は——

「はいはい。そこまでよ、可愛らしい子鬼さん。紫もろとも地獄で閻魔様に怒られてきなさい」

「なんで私も!？」

「幽々子!？ 悪いのはこいつで……」

「なんだかもう面倒くさくなっちゃった。貴方達を地獄に送っておけばこの宴会騒ぎも終わるでしょ？」

「バレてたの!？ 確かに私がみんなを萃めてたけど……」

え？ と言うことは、この少女——いや鬼か——がこの宴会の首謀者だったのか。でも、鬼ってもう幻想郷にはいないって聞いてただけど……。

「ゆ、幽々子？ 私を送る必要はないわよ？」

「駄目よ、大人は子供にお手本を見せなくちゃ。美桜に霊夢、紫が今から責任の取り方を教えてくれるわよ」

「紫様……力及ばず申し訳ないです……」

「自業自得ね。今日の酒の肴にしておくわ」

私たちの言葉が届いたのかどうか、それは本人達にしか分からない。

紫様と鬼の悲痛な叫びに耳を塞ぎながら、二人の無事を祈っていた。

「なるほどな。さっきの悲鳴はそれだったのか」

「はい。お酒を奪って回っていたのは鬼——萃香さんをおびき寄せるためだったそうです」

「ま、別になんでもいいぜ。私はこうして酒が飲めて楽しくわいわいやればさ」

「鬼……幻想郷にもいたのね。興味深いわ」

「ていうか……アレ、平気なの？」

紫様と萃香さんのお仕置きが終わった後、宴会に参加する人たちが割りとすぐに集まってきた。当然ながら悲鳴と、どうして紫様と鬼が積み重なって倒れているのかを全員が尋ねてきた。なので事の顛末をすべて知っている私と霊夢さんが説明をしているというわけだ。お母さんはそんな気はないようで、既にお酒を飲み始めている。パチュリーさんを除いた紅魔館の人たちは霊夢さんに任せて、私はこの三人の魔法使いを相手に説明をしている。べ、別にレミリア

さんが怖かったとか、そんな理由じゃないんだからね？

宴会客より早くやってきていた妖夢お姉ちゃんいきさつは、事の経緯を一瞬で理解し、鬼の介抱を始めた。その甲斐あってか鬼はすぐに意識を取り戻し、名前とこんな事をした理由を聞くことが出来た。ついでに能力なども。

それを聞いたお母さんが角を折ろうとしたのは、まあ……流石に全員が戦慄した。あれ以上は流石にやりすぎだよ、お母さん。

そして、アリスさんが指をさした紫様はというと。

「ゆ、紫様！ 起きて下さい！」

「……大丈夫よ、藍。あの死神にお金を渡して閻魔に怒られてくればいいんでしょう？ 楽勝よ」

「紫様ああ！ 見えてるんですか死神が！？ 絶対駄目ですよ！」

こんな感じ。藍様との会話を聞く限り、今の状態は危ない気がしてならない。

死神……小町さんかな？ 送り返してくれるといいんだけど。映姫様に捕まったら紫様は二、三時間説教されてもおかしくないってお母さんが言ってたし。還って来れなくなってしまう。

しかし、ここに居る殆どの人妖はそんなことなど気にしない。萃香さんに至っては自分の瓢箪からどんどんお酒を出して紫様の口に入れている。その都度藍様に怒られているけど、反省はしていないだろう。なんだか、紫様が本気で心配になってきた。

「す、萃香さん。流石にやりす」はいはい、美桜も飲みましょうねー」……お、お母さん？」

萃香さんを止めようとしたら、離れていたはずのお母さんによって阻まれた。なんだろう、目が「紫の罰はまだ終わっていない」と言っている気がする。

それでも止めようとする、かなり度の強いお酒を手渡された。え、これをどうしろと？ まさか紫様の口に放れなんて言わないよね？

「やっぱりね、考えてみたら美桜もすこしだけ今回のことに責任があると思うの」

「う、うん。そうだね、勝手に出ていったことは確かだもんね。でもお酒は関係ないよ？」

「だからね、それを飲んで今回のささやかな罰にしようと思うの」「もう少し分かりやすく説明してくれると嬉しいな」

いつもの事ながら言っていることの真意を測れない。というか、こんなの飲んだら卒倒しちゃうよ……。

「あなたはね、酔うと周りにすごく甘えるの」

「何それ知らないよ!？」

「そりゃあ貴女は酔ってるもの。で、それが可愛いから見たいの」「嫌だよ!？ そんなこと聞いて飲む人なんてどこにもいないよ!？」

「じゃあ、一日中私と一緒にいるのとどっちがいい？ 勿論お風呂も寝るのもトイレも一緒だけど」

「せめて最後のは勘弁して……」

それは罰とかじゃないと思うんだ。親子の一線さえ超える何かだよ。

「仕方ないわねえ……。それくらいなら許してあげるわ」

そう言い残し、お母さんは萃香さんのもとに向かって行——あ、殴った。

「お前も大変そうだな。明日、頑張れよ」

「図書館に来れば本くらい貸すわ」

「うちに来てくれれば愚痴くらい聞いわよ」

「ありがとうございます……」

人との繋がりがって、こんなにも大切なものだったんだね。ずっと冥界にいたから知らなかった。

こうして一言では形容できない結果を残し、私と紫様、そして萃香さんにトラウマを植えつけた異変は解決されたのだった。

永夜抄く亡霊、半霊、人間タツゲ

「ねえ美桜、月がおかしいと思わない？」

「え？ そうかな、私は別になんとも……」

「いいえ、絶対におかしい。どうしよう、幽々子様に伝えるべきかなあ」

「じゃあ訊かないでよ……」

縁側で妖夢お姉ちゃんと寛いでいたら、唐突にそんな質問をされた。別に私にはいつもと同じに見えるけど……おかしいって、何だろう。

「そうよねえ。自分の意見を曲げる気がないのなら訊く必要がないじゃない」

「あ、幽々子様」

「お母さんもおかしいと思ってるの？ あの月」

「ええ。でも人間には分かりづらいでしょうね、あれは」

「……そっか」

私は二人と違って“人間”だから、今回の異変が良く分からないらしい。なんだか酷く疎外感を味わってしまう。お姉ちゃんも半分人間なのに。

「でも、異変なら霊夢さんが解決してくれるんじゃない？」

「美桜、今言ったでしょう？ 人間は気付かないわ。という訳で妖夢、行ってみない？」

「私がですか？」

「私たちで。誰も動かないみたいだし」

「分かりました。お供します」

どうやら二人は異変解決に行くことにしたようだ。となれば弾幕、
もとい戦闘が苦手な私に出番はないので、自動的にお留守番決定だ。
……別に拗ねてないもん。

「……行つてらっしゃい、二人とも。先に寝てるね」

「あら、どうしてそうなるの？ あなたも行くのよ？」

「それこそどうしてなんだけど……。私がこの異変で出来ることな
んてなにもないよ？ 異変にすら気付かなかつたし」

「だから、それは当然なのよ。この異変に気付くのは月が重要な妖
怪のみよ」

だつたら尚更私は必要ない。そう食い下がろうとしたが、手を叩
いて「はいはい議論は終了」。異議は認めないわ」と言つて抱き
締められてしまったら、もう抵抗する手立てなど存在しない。所詮
私はお母さん大好きっ子なのだ。

「それじゃあ、さつさと行きましようか」

「でもさ、異変解決中に朝になったらどうするの？ 月がおかしい
んでしょ？」

「それもそうね。夜を止めておきましよう」

そんな「ごはん食べよう」みたいな軽いノリで止めていいものだ
つたつけ、夜つて。……まあ、お母さんだからいいか。問題ない、
きつと。

「幽々子様、美桜を一人でここに残していきたくなかっただけでし
ようっ。」

「……バレてた？」

「美桜は気付いてないようですけどね。でも、それなら私に任せてくれれば……」

「あ、それは無理。頼りないもの」

出発前にこんな会話が交わされていたことを、私は知らない。

「あ、蛭だ」

「本当。最近増えてきてるわねえ」

「美桜、幽々子様！ 何をのんびりしてるんですか。早く進みますよ！」

「……お母さん、妖夢お姉ちゃんのテンションについていけないよ」

「こんな時間なのに元気よね」

真夜中だというのに、そうは見えない動きで妖夢お姉ちゃんは先陣を切る。蛭くらい見る余裕がなきゃ駄目だよ。

「？ 気な事を言わないでください！ そこに敵がいるのに気付いていますか!？」

「お母さん見て。すごく大きい蛭がいるよ」

「そうね。じゃあ妖夢も急いでるみたいだし先に行きましょう」

「そうだね」

「いやいや、ちょっと待ってよ！ 敵って分かってるのに素通りするの!？」

そう言って私たちの前に立ちはだかったのは蛍の妖怪と思しき少女、いや少年？ …… まあ、どっちでもいいか。

「敵って言ったのは妖夢お姉ちゃんだよね？」

「責任持って相手をしてあげなさい。私と美桜は景色を楽しみながら先に行ってるから」

「そんな！？」

嘆くお姉ちゃんを置いてお母さんは私を引っ張っていく。あのくらしい相手ならすぐに倒して追いつけるだろうから心配はしない。頑張れお姉ちゃん。

「な、なに？ 結局戦うの？」

「……こうなったら、あなたをさっさと倒すしかない。行くわよ！」

「……？」

お母さんと二人で歩いていると、不意に声が聞こえてきた。声と言つか歌と言つか……。なんだか、これを聞いてると変な感じになってくる。お母さんは大丈夫なのかな……？

「……美桜、これを聞いちゃ駄目よ。なるべく耳を塞いでなさい」「う、うん……」

「心配しなくても大丈夫よ。必ず守ってあげるから」

いつになく真剣そうなお母さんの声色に不安を感じて傍によると、安心させるように優しく頭を撫でてくれた。更に抱きついて甘えれば、柔らかな微笑んでそれを受け止めてくれる。

「どうしたの？　今日は随分甘えん坊ね」

「……大好き」

「もちろん私もよ」

普段、私はこんな夜遅くに出歩くことはない。なので私にとって、今の状況は何が起こるか分からないという恐怖に満ちている。襲われても死ぬ気は更々ないが、それと感覚は一致しない。

だから、その恐怖を緩和させてくれるお母さんに頼るのは仕方のないことだと言える。ただ甘えたいという理由が四割を占めているとかではない。

「あ、人間発見！　さっそく襲っ……へばう！？」

「お、お母さん？　今誰か居なかった？」

「気のせいじゃない？　それよりそのまま耳を塞いで、妖夢が来たら分かるように少しだけ戻ってなさい。来た道だから心配は要らないわ」

「え？　う、うん」

言い知れない雰囲気を感じ取ったので、素直に言うことを聞く。

あの萃香さんと紫様の一件以来、お母さんを怒らせないようにしようと固く誓ったのは記憶に新しい。

不安はあるものの、私はもと来た道に戻っていった。

「ねえ、今の雰囲気分からなかった？ 最近じゃ滅多に甘えてくれない娘が自分から来てくれたのよ？ 夜雀風情がなに邪魔してくれてるの？」

「私の歌声が届く奴が現れたらそりゃあ襲うでしょ。ていうか、あなたはその歌が効かないの？」

「私は亡霊だもの。でもあの子は人間。夜雀の鳴き声なんて不吉なものも聞いてちゃって可哀想に。雀は小骨が多いからあげても喜ばないでしょうし……もう倒すしかないわ」

「なんでそうなるのかわからないけど、やるって言っんなら容赦しないよ！」

「あなたには親子の時間を邪魔した罪を、骨の髄まで分かせてあげるわ。せいぜい良い悲鳴をあげることね」

妖夢お姉ちゃんと合流し、一緒に歩いていたら時に悲鳴が聞こえてきた。それもお母さんがいる方向から。

「……まさか」

「美桜、気にしちゃ駄目。何も聞いてないことにするのが一番よ」
「……そうだね、そうする」

先刻までいた場所に辿り着くと、どこかすっきりした顔のお母さんが私たちを待っていた。その横には誰かが倒れていた気がするけど、きつと気のせいなんだよね。

永夜抄く家族とは

「あれ？　ここ何処？」

「変なところに来ちゃったわねえ」

「そうですね……。どうしましょうか」

「里を襲おうとしているのはお前たちだな？」

道を間違えたのか、何も無い所に出てしまった。

どうしようかと相談していると、いきなり人が現れた。現れたのはまだいいが、変な疑いをかけられてしまったようだ。里？　どこにそんなものが……。

ああ、もしかして幻術か何かで隠してるのかな。見えないわけだけど、自分でここにあるって言ってるようなものだよね、今の言葉って。

「……そうなの？」

「そんなわけないでしょうが。私はただ幽々子様についてきただけなんだけど……」

「目的地に行くには、ここを突っ切ったほうが早いよ」

「む？　君は……人間、か？」

私を見て、そう訊いてくるのは長い白髪の女性。その通りだと首を縦に振ると、突如烈火のごとく怒り出した。

「貴様ら、その子をどうする気だ！　私の前で人間を襲うなど許さん。ここで捻り潰してやる！」

なにか勘違いをされている気がする。……お母さん、お姉ちゃん、その素敵過ぎる笑顔をやめて。今のは私もイラッと来たから気持ち

は分かるけど、あの人が私の心配してくれているというのも分かるから。

ただ、言い方にはちょっとカチンときたけど。

「……誰だかは存じませんが、勝手に私を被害者にしないでください。私たちは家族です」

「なんだと？ 亡霊と人間が？」

「いけませんか？ そもそも私、人里嫌いなんですよ。だから通らせてください」

——私を捨てたかもしれない、産みの親がいるから。

とは、流石に言えなかった。今更なんとも思わないし、親は一人だけだと思っているが、そこまで言う必要もないだろう。

「……それは済まなかった。無礼なことを言ったな」

しかし、さっきの言葉だけでそこら辺の事情を理解してくれたらしい。好都合……なの、かな。

「お詫びとして、ここを通らせてくれるなら水に流します」

「……何というか、しっかりしてるな。いや、ちゃっかりしてると言うべきか？」

「そんなことはどうでもいいですから。通りますよ？」

「……まあ、里に危害を加えないなら止める必要もない。構わないよ」

「どうも。二人とも、早く行こうよー」

未だに不機嫌そうな顔つきのお母さんとお姉ちゃんを呼ぶ。戦わずに通してくれるんだから、そろそろ水に流そうよ。

「……ええ、そうね。（半獣、次会ったときは容赦しないわ）」
「早く行きましょう。（幽々子様、私も手伝います）」
「わ、悪かったと言ってるだろう。……そうだ、私は上白沢慧音。
人間の少女、君の名前は？」
「……西行寺美桜。お母さんたちから貰った、誇りある名前です」
「そうか、いい名だな」

ポンポンと頭を数度撫でられ（叩かれ、の方が正しいかもしれない）、周りには聞こえないような声量で囁かれた。

「——話したいことがあるから、今度里に来てくれないか？ 来るのが嫌なら私から出向いてもいい」
「……………」

十中八九、私の境遇についてだろう。その話に関して出向かれたら困るので頷いておく。それを見ると上白沢さんは満足そうに頷いて、道を通してくれた。

……二人には聞こえていないようなので安心した。これを知られたらついて来ると言い出しかねない。というか絶対に言うから。余計な心配はかけたくない。

なんだか面倒なことになるかもなあ、と思いながら、お母さんたちと先を急いだ。

side of a third party（第三者視点）

——あ、帰ろう。と、霧雨魔理沙は思った。

彼女は夜がいつまで経っても終わらず、朝が来ないのでその原因を退治しにやって来た。現在自分の下にいる、白玉楼の住人——西行寺幽々子と魂魄妖夢がその原因だろうと彼女は睨んでいる。

いつもならこの二人を倒して問答無用に夜を止めるのをやめさせればいい。しかしそこにはもう一人、人間がいた。西行寺幽々子が溺愛している愛娘、名を美桜という。彼女がいるとなると話は違ってくる。

なぜならその少女が危険に身を晒されたとなると、幽々子はいつも以上に超人的な力を発揮する。噂によると閻魔様に会えるらしいほどの何かが待っているという。

その現実をいつぞやの宴会で見せられた魔理沙が、この親子の組み合わせに恐怖を抱くのは仕方がないことだ。平時ならともかく、暴力的行為でものを解決しようとしている今は、下手を打てば幽々子の琴線に触れる。そうなれば考えたくない未来が待っているのだ。

「……三十六計逃げるに如かず。ここは引いておくが吉だよな」

気取られぬようにそう呟いて少女は夜空に消えて行った。次に眠って起きたら朝が来ているように願いながら。

謀らずも、この親子は戦いの芽を普段の行動で潰すというスキルを得た。しかしそれに本人たちが気付くことはないだろう。

永夜抄く 兎祭り

「あ、兎だ」

人里を危なげ無く通過し、やって来たのは竹林。見つけたのは多数の兎。言い換えれば大量のもふもふ。藍様には及ばないが、愛でたいものである。

「妖夢、明日は兎鍋にしない？」

台無しだ。たしかに貴重なタンパク源だけど。

「ちよつとちよつと！ 私の前で兎を食べるなんて言う奴はどこのだいつよ！」

「あら、兎が喋ったわ。妖夢、これを調理しなさい」

「えええ！？」

斬るんじゃないで調理。無茶を言っちゃだめだよ、お母さん。妖夢お姉ちゃんは真面目だから本気にしちゃうんだって。

「へー、私を食べるって言うの？ やれるものならやってみせてよ」「妖夢。お言葉に甘えてやっちゃいなさい」

「いやいやいや。お母さん、いくらお姉ちゃんの前に落とす穴があるからって落とそうとしなくても……」

「そうだったんですか幽々子様！？」

「ばらしちゃだめじゃない。折角妖夢のお茶目な姿が見れると思ったのに」

全く悪びれる様子がない。私に落ちないように注意したのに、妖

夢お姉ちゃんはいいのか。

何だか、お姉ちゃんちよつと涙目になってない？ 最初に置いて行かれた所から散々な目にあってるからかなあ……。

「わ、私の罾が見破られてた！？ こうなったら……」

完全に逃げる体勢になっている妖怪兎。しかしそれを黙って見過ごすお姉ちゃんではない。

落とし穴を警戒したのか妖怪兎の所まで飛んで行き、止める間もなく一瞬でピチューンさせた。全く慈悲の攻撃だった。例えるなら、そう。お母さんに文句が言えないやりきれなさが滲み出ているような一撃。

「無駄な事に時間を取られちゃったわね」

「それなら最初から飛べば良かったじゃん……。というかなんで歩いているの？」

「歩いている方が情緒を感じられるじゃない」

情緒を噛み締めながら行く異変解決。本当に緊急を要しているのか疑問に思う。

「まあ、ここからはあの兎の罾も多そうだし。飛んで行きましょうか」

「そうですね」

今の攻撃である程度はすっきりしたのか素直に従うお姉ちゃん。

間接的にストレスを解消できないと、従者なんて出来っこないのだ。

「……また兎だ」

「また兎ね」

「次も兎とか言わないわよね？」

「初対面なのに何この言われよう!？」

少し進むと、さっきとは違う妖怪兎がいた。本当に兎多いなあ、この竹林。

「というか誰よあんたたち！ 姫のお迎えじゃないのは分かるけど」

「迷惑なこの異変をやめてもらいに来たのよ」

「異変？ ああ、月のことね」

「そうよ。やめてくれないかしら？」

「心配しなくても朝になれば終わらせる。それまでは我慢してくれ
るとありがたいのだけれど」

次いで出てきたのは、赤と青を基調とした服を着ている銀髪の女
の人。人……だよね？

「いやよ。今すぐにやめなさい」

「もう少し理由を聞いたりしてくれないのかしら」

「……ねえねえお母さん、朝になればやめるって言ってるんだから
いいんじゃない？ 嘘を言ってるようには見えないよ」

「どうやら話の分かるお嬢さんがいるみたいね。その子の言う通り、
私は嘘をつかないわ」

「美桜、人を見た目で判断しては駄目。甘い言葉には裏があるもの
よ」

「いや、本当に平気だと思っただけ……」

なんだかんだで、異変を起こす人というのは裏表がない。“異変”というか、“弾幕ごっこ”で相手をしてくれるというのは、そこまで敵意がない証明でもある。あれは非殺傷でやるもので、本気で何かを成し遂げたいのならそんなのに付き合う必要はないからだ。まあ、当たり所が悪ければ死ぬけどね。

故に朝になれば終わらせると明言した以上、そこまで躍起にならなくてもいい気がする。

「駄目よ。あの言葉が嘘であろうと本当であろうと、こんな事されて何もせずに許したら幻想郷の面目丸潰れじゃない。お仕置きくらいはしておかないと」

たしかにそれは一理ある。けど……さっき来た女の方は、本気で敵に回しちゃいけない気がする。あくまで勘でしかないけど、お母さんが本気で倒そうとしても倒せないような雰囲気がある。

尤も、亡霊であるお母さんが負ける気もしないが。

「……本気で戦っちゃ駄目だよ。絶対に弾幕ごっこだけにしてね」「分かってるわ。そんなに殺気立っているように見える？」

「念のため。能力とかやめてね」

「心配性ねえ。大丈夫よ、死なない程度にお仕置きするだけだから」「死なない程度に、ね。私にそれをしたいのなら、殺す気でかかってこないと不可能よ？　まあ、とりあえずここは任せたわ、ウドンゲ」

「はい、お師匠様。さあ、さっきはよくも兎を馬鹿にしてくれたわね。かかってきなさい！」

お師匠様と呼ばれた女の人は扉の一つに消えていき、ウドンゲと呼ばれた人は臨戦態勢に入る。別に最初のは兎を馬鹿にした訳じゃないのに。ただ多すぎだと思っただけなんだ。

「あらら、逃げられちゃった。妖夢、さっさとこの兎を倒して追っ
わよ」

「はい。一瞬で斬って先に進みましょう」

「ふふふ。私の目を見てもまだそんなことを言っていられるかしら
？ せいぜい狂気に堕ちないように気をつけなさい！」

口を挟む隙もなく始まった戦闘。流れ弾に気をつけながら場所を
移動していると、開いている扉を見つけた。さっきの女の人が入っ
て行ったのは別の扉だ。

「……………」

気になってそこに近寄ってみる。ちらりと戦闘の様子を伺えば、
誰も私に気付いていない。

「なんだろう、此处。封印し忘れたのかな……………」

だとすれば結構間抜けな話だ。それとも罠だろうか。

「……………行ってみよう、かな」

好奇心に負け、私はその扉の中に入ってしまった。

永夜抄く永遠と邂逅

「うわぁ……すごい満月」

しばらく歩くと、満月が鎮座している場所に出た。

輝く月を綺麗だとは思うが、頭のどこかがあの月を見てはいけな
いと警告をしてくる。

「あら、お客様かしら？ その真実の月は見ないほうがいいわよ。
狂ってしまうから」

「っ！ だ、誰？」

「自分から名乗るのが礼儀じゃない？ まあ別にいいけどね。私は
蓬萊山輝夜」

「す、すみません。私は西行寺美桜と言います」

「ふうん、美桜ね。いい名前じゃない」

「ありがとうございます。ですが輝夜さんには及びません。名は体
を表すとはよく言ったものです。夜に光り輝く月のように美しい方
ですね、輝夜さんは」

褒められたら下手に謙遜せずに受け取る。そして倍以上褒め返す。
紫様から教わった女性を敵にしない方法の一つだ。

「……子供の癖に生意気なこと言うわねえ。でもまあ、褒められて
悪い気はしないわ。ありがとう」

「本当のことですよ？」

この方法でやってはいけなのは嘘をつくことだ。素直に自分が
思ったことを言わないと、ボロが出るかもしれないからね。

「……そう真面目に返されると照れるわね。その程度の言葉なんて昔飽きるほど聞いたのに。貴族とか天皇からも」

「当然ですよ。人は美しいものを見ると自然と賛美の言葉を口にするもので……え？」

き、貴族に天皇？　しかも輝夜という名にはどこか聞き覚えが……。

あ、もしかすると、『竹取物語』かな。昔、お母さんに絵本を呼んでもらった記憶がある。後にきちんと古典的な文学の本で読んで絵本との違いに驚いたなあ。主に表現と心情が違い過ぎて。

でもあれって月に帰って終わったはずだよね？　……ちよつと整理してみよう。

月は今回の異変の原因でかぐや姫の故郷。

かぐや姫は実は帰っていなかった。

銀髪の人の『朝になれば終わらせる』という言葉。

更に、さっきの妖怪兔が言っていた『姫のお迎え』。

……なんとなく分かった気がする。今回の異変の原因が。

「まあいいわ。そんなことより人間が此処に何の用？」

「月をもとに戻してもらいに」

「ああ、やつぱり？　でも人間がこの月の異変に気付くとは思わなかったわ」

「気付きませんでした。母たちが教えてくれたんです」

「ふうん。その母親は？」

「妖怪兔と戦っています。恐らくその後は銀髪の方を追っているでしょう」

お母さん、約束守ってくれてるよね……？

「鈴仙に勝つことは前提なのね。でも、永琳は強いからあなたの母親も負けてしまつかもしれないわよ？ 人間じゃあ手も足も出ない程に強いもの」

「あ、それは大丈夫です。母は亡霊で、姉同然の従者は半人半霊ですから」

「まさかの二人組？ というか貴方は人間よね？」

「はい、人間です。戦いが苦手な、どこにでもいる普通の人間です」

本来なら交わることのなかった私とお母さんが巡り会ったのは、偶然だったのだろうか。それとも……。

「暇を潰してくれるのなら普通であろうとなかろうと構わないわ。

永琳たちの戦いが終わったら自おのずと分かるでしょうし、それまで此処でお話でもしない？ ずっと此処にいるのも暇なのよ」

「……じゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」

今更お母さんたちの元へ言っても邪魔になるだけだ。それなら大人しくここで待たせてもらったほうがいいだろう。

その後は取り留めのないことをお互いに話した。分かった事と言えば、この人はあのかぐや姫で間違いないだろうと言う事。少なくとも関係は確実にある。普通の人なら千年以上前のことなんて知らないだろうし、ましてやそれを面白おかしく話せるわけがない。

まあ、だからなんだという話だけだね。おそらく私の知り合い達

は皆「ふーん。そうなんだ」程度の反応しかしないと思う。

けど、私にとっては良い展開だ。この人もまた長い時を、少なくとも千年以上の年月を生きてきた人だ。私の悩んでいることに関して、参考になる意見が聞けるかもしれない。

「……あの、輝夜さん。聞いてもいいですか？」

「何を？」

「——永い時を生きるというのは、一体どんな感じですか？」

「……唐突ね。どうしてそんなこと知りたいの？」

「私は人間、母は亡霊。妖の感覚ではそう遠くない将来に別れが来ます。正直言つて私は迷っているんです。人を捨てるかを……」

幸いというかなんというか、私の周囲には人を捨てる方法が充実している。紫様あたりに頼めば代償なくして人外になれるかもしれない。ただ、だからと言つて簡単に決められるわけでもない。

お母さんたちと永遠を生きるのも一つの手。口には絶対に出さないけれど、お母さんたちも望んでいるであろう方法。

しかし一方で、限られた時を生きるからこそ出来ることもある。短いからこそ思い出を創り、日々を大切に生きて成長を見せることが出来る。

正解なんてものは存在しない。どちらを選んでも結局は後悔するかもしれない。お母さんは私がどちらを選んでも何も言わないと思う。人外になることを選べば自分のためかと悩むかもしれないし、人のままを選べば悲しみを隠してでも見送ってくれるだろう。

どちらを選ぼうとやってはいけないのは自分の気持ちに嘘をつくこと。それがお母さんたちを一番悲しませることになる。それだけは、絶対に避けたい。

「……嫌になる時もあったわ。これだけ長い時を生きてると」
「……………」

「けれど私には、一緒に生きてくれると言ってくれた永琳がいた。ここに来てから鈴仙やてゐにも出会えた。この出会いは人間の寿命だったら有り得なかったわ」

輝夜さんの“長い時”というのは、どれほどの期間を現しているのだろう。数百年か数千年か、それともよりも長いのだろうか。

「だから、そんなに嫌なことばかりではないと思うわよ。もちろん先立たれる悲しみもあるけれど」

「……参考になりました。ありがとうございます」

「まあ、よく考えることね。自分自身の後悔しない道を」

「——はい」

沈黙が続き、その間に今言われたことを反芻する。

『後悔しない』道。果たしてそんな道があるのだろうか。結局どんな方向を選ぼうとも、後悔してしまうのではないだろうか。お母さんたちを、悲しましてしまうのではないだろうか。

……今はまだ焦らなくていい。少しずつゆっくりと考えていこう。たとえどんな道を選ぼうとも、私はお母さんの娘。それが変わることはないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6843y/>

白玉楼の家族模様 改訂版

2011年12月30日11時48分発行